発刊のことば

沖縄県教育委員会　教育長　金城弘昌

一九九四年（平成六）に開始された「新沖縄県史」編集刊行事業では、沖縄県史シリーズの一環として、未公刊資料あるいは稀少文献等を刊行し、琉球・沖縄史における基礎資料の整備を進めております。本書は二〇〇五年にpart I(1845-51)、二〇一二年にpart II(1852-54)を刊行した『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim, 1845-54』の日本語翻訳版となります。本書の翻訳版刊行の計画は、沖縄振興特別推進交付金による事業として二〇一二年度（平成二四）より進められてまいりましたが、このたび、そのうちpart Iの翻訳が完了し、『沖縄県史　資料編26　ベッテルハイム日誌および公式書簡　part I(1845-51)　近世4』として刊行されることとなりました。

本書の著者バーナード・ジャン・ベッテルハイム（一八一一～一八七〇）は、ハンガリー生まれのユダヤ人です。長じて医学を修め、軍医として滞在したトルコで英国国教会の教えに出会い、改宗してキリスト教徒となりました。イギリスに渡り国籍を取得した後、退役海軍士官らが組織した英国海軍琉球伝道会の派遣宣教師に採用され、妻子とともに琉球に赴任してきます。琉球には一八四六年四月末から一八五四年七月の足かけ九年にわたって居住しました。これはペリーによる開国以前に琉球に滞在した外国人としては最長となります。滞在中は熱心に布教に励みますが、当時はキリスト教禁教下にあり、布教を阻止したい王府との攻防に明け暮れることとなりました。本書には那覇や首里での布教の様子はもちろん、遠い異教の国で孤軍奮闘する心情が随所に吐露されています。本来の「業務日誌」の枠を超えて、筆者個人の内面や思考が縷々書き連ねられる生々しさも本書の特徴のひとつと言えるでしょう。時にはその言葉は辛辣にも感じますが、読者には、祖国を喪失したユダヤの民として生まれ、マイノリティとして生きる困難を矜持と信念によって打開しようと模索し続けたひとりの人間に対する公平な視線と他者理解の心を持っていただきたいと思います。

歴史資料としては、アヘン戦争以後の激動の東アジアにおいて、国際社会に飲み込まれていく中国と日本とのはざまで

対応に苦慮した琉球の姿を見ることができます。『評定所文書』などの琉球側の記録とつきあわせて、立場や考え方の違いを対比しつつ読むことで、より立体的に当時を観察することができるでしょう。とりわけ、日誌中に大量に挿入されたベッテルハイムと王府との往復文書は、今後の琉球外交史研究の有用な史料となると期待されます。伝道活動にとどまらず、英語と琉球語の相互教授、医師としての活動から住居の補修、食糧の質の向上に至るまで、あらゆる事態に交渉を重ね、ぶつかり合いながらも前進しようとしている姿を本書は語ってくれます。日々の生活を共にした監視役兼世話役である王府派遣通事らとのやりとりには、思いやりの心やよき相棒としての一面を垣間見せることがあります。那覇の人々に「波の上の眼鏡」とあだ名された近しさもこのような中から生まれたのかもしれません。また、民俗・言語資料としては、当時の人々の暮らしの様子、ベッテルハイムが書き留めた当時の言葉や発音なども貴重な記録です。当時の琉球の姿に思いをはせながらお読みください。

最後になりますが、本冊のために尽力くださった沖縄キリスト教学院大学の浜川仁教授、同校および琉球大学非常勤講師のレイフィールド典子先生、琉球大学非常勤講師の吉田兼次先生に篤く御礼申し上げます。事業立ち上げ当初より長期に亘り、翻訳・校閲・編集協力者会議のすべてに携わり、数多の知見をお示しくださいました。また、本書の翻訳は、二〇〇五年に刊行された翻刻版なくしては不可能でした。著者ベッテルハイムの多層的な背景から繰り出される語や表現の翻刻・読解には幅広い知識が要求されるのみならず、決して達筆とは言えない手稿を読み解いてくださった沖縄県立芸術大学名誉教授Ａ・Ｐ・ジェンキンズ先生に心より感謝申し上げます。同氏は今回の翻訳作業においても、翻訳者や事務局からの質問にひとつひとつ誠意をもって対応してくださいました。その他、個々のお名前は挙げられませんが、多くの方々や機関がご協力くださいました。心より感謝申し上げます。

本書が、県民および必要とされる皆様に手に取っていただけますよう、そして本県の歴史理解の一助となりますよう願うとともに、今後とも沖縄県史編集事業にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和四年（二〇二二）三月